

シメの左半身麻痺



○保護

2019年2月15日（金）午前9時ごろに、滋賀県高島市今津町今津にある公立保育園の窓に追突し、落ちたところを保護された。保護者によると、10分程して動き始めたようである。

○受取

当該保育園の保育士の方が、夜まで保護されていたが、全く立てないこともあり、20時30分ごろに、当グループに持ち込まれた。体重は51gであった。

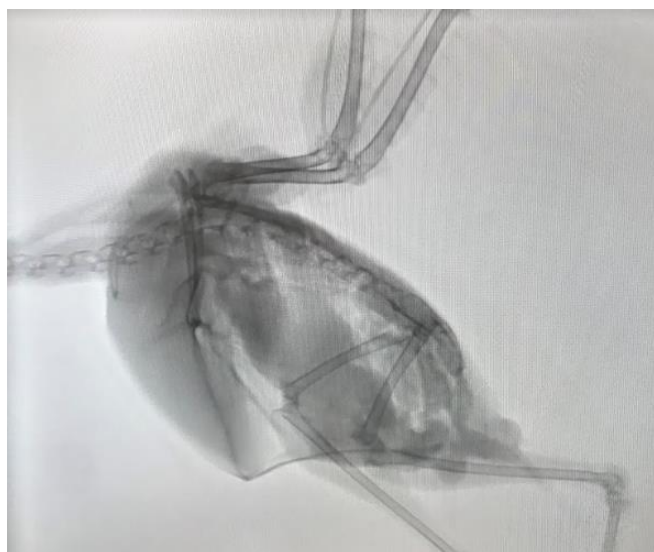
○症状

受取時の症状としては、衝突による麻痺のためか立つことも移動することもできなかった。頭を持ち上げることはできるが、逃げようとしてもその場で回り続ける状態であった。麻痺は、左半身に起きている様子で、左翼も左脚もうまく動かないことが顕著に分かった。麻痺はあるものの、全く動かすことができないわけではなく、左翼は羽ばたくことができ、左趾には握る力もあった。高い場所からならば、飛翔能力が皆無というわけではないが、麻痺のある側へ墜落することしかできなかった。

○診断と治療

レントゲンにより、頭部右側の中に炎症（または軽い出血）が診られた。他の場所についても、レントゲンを撮影したが、目立った異常は確認できなかった。





治療として、消炎剤（オンシオール）の飲み薬を1日1回11日間投薬した。

○飼育とリハビリ

左側に麻痺でうまく立てないため、当初は小さい段ボールの中にタオルを使ってもたれられながら、頭を乗せられるようにした。立てないこともあり、餌を自食することができなかったため、保護から8日間は強制給餌により、体重の維持を図った。強制給餌は、ラウディブッシュのリカバリー、ネオネイトを湯で溶き、経口カテーテル（ゾンデ）で嚔嚢（そのう）に入れる（約2ml/回）他、各種ペレット（シギペレット、食虫種用ペレット、オウムペレット）、ヒマワリの種、ミルワーム（缶詰）をピンセットで喉深くに入れるなどを4~5回/日（0.5~1.0g/回）行った。

リハビリとしては、自力運動の時間を持たすことを中心としながら、1日2回は麻痺のある左翼と左脚を可動域最大まで動かすように他動運動を行った。翼の他動運動を行う際には、左手で体を持ち、左手薬指で肘関節を下から支え、右手を使って翼を安全に伸ばせるよう配慮した。（写真）

その他、体力回復には広いスペースを設ける必要があるため、ワンタッチの蚊帳 → 部屋全体を覆う蚊帳の順で広いスペースを確保し、1日2~3回程度追いながら体力回復を促した。



また、外気温への順応については、日中夜間ともに保温 → 夜間の保温 → 日中のみ窓を開けて外気温と近い室温 → 日中夜間ともに窓を開けて外気温と近い室温という順を追った。保温状態から外気温への移行は、1日につき1~2℃ずつ下げていくように行った。

雨に耐えるために必須となる撥水機能については、水浴びスペースを設ける他、1日2回の霧吹きを行った。撥水機能は羽の構造に頼るため、霧吹きをして羽繕いを多くさせることで回復する。今回は、腹側背側ともに2~3日程度で回復した。

○経過

保護2日目には、運動能力としては変化が見られなかったが、前日より元気があるように見えた。

3日目には、壁を利用して立てるようになった。同時に逃げるときに地面からでも少し飛べるようになった。飛翔能力は、高さ20cm、距離1~1.5m程度で、左側に墜落するように落ちた。飛翔中は、目視でも左翼が開ききっていないのがわかるほどだった。

6日目には、左側の壁を利用してよく移動するようになった。起立も昨日までと違い、数秒であるが倒れないように我慢できるようになった。

8日目には、ヒマワリの種を食べた痕跡（殻）が確認できた。

9日目には、ホッピングで移動できるようになり、左側を壁にして同一方向のみの移動だけでなく、ランダム方向に移動できるようになった。この頃、これまで左傾きを補正するために翼を使って体を支えてきたことが原因で、左翼外側に小さな擦り傷ができたため、キトサンを塗布することで管理した。

10日目からは、固形の餌での完全自食に切り替えた。使用した餌は、ミルワームの缶詰、ヒマワリの種、ハト、インコのシード餌、粟穂、食虫種用ペレットである。

11日目には、まだホッピング中にまだ左に倒れることが確認できたものの、少し高い飛翔ができるようになっていた。この日から伸展運動（他動運動）を終了し、完全自力運動のみのリハビリに切り替えた。

12日目からは、運動を増やせるようワンタッチ蚊帳でリハビリを開始した。また、この日からエアコン管理していた室温約28度を1~2度ずつ下げるようにしていき、外気温に近づけていく放鳥準備を行った。

これ以降は、体力の回復、外気温への順応、雨等全天候に対応できる羽毛の撥水機能の回復の3点を中心にリハビリを行った。方法としては、上述の通りである。

【動画】

救護翌日~8日目：<https://youtu.be/ZJ5lxXwxPVU>

救護11日目~放鳥：<https://youtu.be/Es9GmIWl5YM>

○放鳥

保護から23日目の2019年3月9日(土)12時23分に保護地から約80m東に位置する神社で放鳥した。

放鳥に際しては、重さによる負担に配慮するためリングの装着は行わなかったが、数時間追跡することと、再度付近で保護された場合の個体識別のために、脚のふしょ部をマジックでマークした。



約1時間目視による追跡を行ったが、高木の上部で羽繕いをしたり、複数本の木を行き来するなど、行動に問題点は見られなかった。

長時間の追跡は、採餌の邪魔になる可能性があり、それは小鳥にとって致命的なエネルギーの減少につながる可能性があるため、行動確認後は早々に追跡を終了した。

○考察

当初は重度の麻痺がみられたが、約23日で放鳥することができた。

衝突では、短期間に脳震盪が回復し、当日放鳥できることも珍しくないが、今回のような麻痺の状態からすると、最終的に回復し、麻痺も残らず放鳥できたこと自体が驚くレベルであった。当初の状態からすると、今回の放鳥までの日数は、十分、早期放鳥と評価できるものではないかと感じている。



早期に放鳥できた要因としては、以下の点が挙げられる。

- ① レントゲンでの炎症発見により、早期に消炎剤の投与ができたこと、
- ② 麻痺中にも、強制給餌により体重減少を抑えられたこと。
- ③ 羽を破損せず、管理できたこと。

小鳥の救護において、診断、体重維持、羽根の管理、気温の管理が大型鳥に比べて難しいことは言うまでもないが、逆に言えば、これらの技術を有することで、今回のような半身麻痺でも、問題なく放鳥できる可能性があることがわかった。